

## 徒然の記 その四

### 種火と付け木

#### 種火

字引を見ると、種火とは「いつでも火をおこせるように、またガス器具などですぐ着火できるように用意しておく小さな火」と書かれていて、「囲炉裏に種火を残す」「ガス器具の種火」とふたつの使用例が示されています。

自動点火が当たり前となった当今の人には、後者の使用例のほうがピンと来るでしょうが、これから語るのは前者のほうです。

火を熾す術を知らなかった太古の人々は、山火事から取ってきた火を、埋み火にして種火に使っていたのでしょ。

埋み火とは、文字通り灰の中にうずめた炭火のことですが、燃え残った木や、火を付けた炭に灰を被せて直接空気に触れないようにしておく、長い間灰にならずに残っています。

戦前はどの家庭にも囲炉裏や火鉢があり、灰の中には火種に使う火が埋められていました。

火が必要な時は、掘り起こしてその上に薪や炭を足して火力を強くして使いました。

#### 付け木

薄く削った木の板＝経木(きょうぎ)の先に硫黄を塗ったものですが、硫黄の付いているところを種火に押しつけると簡単に発火します。

江戸時代から使われていたようですが、マッチが普及するまでは、どの家庭も付け木を使って竈の焚き木に火を付けていました。

ちなみに、日本でマッチが製造されるようになったのは明治 8 年(1875 年)だそうです。

昔の人は、竈(かまど)で煮炊きをする時には、囲炉裏(いろり)や火鉢の中の種火を掘り起こし、付け木の先に火をつけて竈のあるところまで運び、薪の下に置いた焚きつけ(=丸めた紙やかんな屑など)にその火を移していたのです。